

自由図書の部 佳作

福島多慧子さん 文学部英米文学科4年

『永遠の出口』 森絵都著 集英社

どこにでもいる主人公、だから共感できる

学生時代の思い出というと、どのような場面が目浮かぶだろうか。入学式、運動会、遠足、卒業式だろうか。意外とこれらの、卒業文集のテーマに選ばれるような大きなイベントは思い出されない。それよりも浮かんでくるのは、永遠に終わることがないと思えた日常的一幕だ。机を並べて授業を受けて、給食を食べて、掃除をして、部活をして、下校する。なにも特別でなかった毎日が懐かしく思い出される。この本はそんな日常を丁寧に描き出し、忘れていた感情までも思い出させてくれる。

本書は、どこにでもいる「私」、岸本紀子の小学三年生から高校卒業までを描いている。誕生会をやってもらえない友達がいて、風変わりな担任の先生におびえた小学生時代。ほんの少しのボタンの掛け違いからもう二度と戻れないのではないかと思った家族との溝と、ぐれた中学時代。初めて社会との関わりを知ったバイトや、いつのまにかのめり込んだ初恋と失恋を経験した高校時代。そのひとつひとつの出来事や感情が手に取るように丁寧に描かれ、それぞれの時代に忘れてきた些細な記憶を呼び起こしてくれる。

中でも、第三章「春のあなぼこ」は特に共感できた。小学校を卒業して中学生になる前の春休み。紀子は小学生の時に仲の良かった2人の友人と初めて電車に乗り、子供たちだけで遠くのデパートまで買い物をしに行く。最後、最寄りの駅から自転車で走り、私立の、紀子とは違う中学校へ進学する友人と別れるシーン。「またいつでも遊べるよね」と口で確認しあいながらも、紀子は心の中で「私立の中学なんて月より遠くに決まっている」ともう二度と同じ学校に通うことのない友人との別れに打ちのめされる。小学校の卒業なんて、と大学生になった今は思う。新しい環境でまた新たな友達ができると知っているから。しかし、確かに小学生の時は不安だったのだ。違う中学校に進む友人と、今までと変わらない関係でいられるはずがないと分かっている、それでも「卒業」を迎えた私たちは進まなくてはいけないということを知っていたからだ。これからまた友達ができるとかそういうことは関係なく、ただ目の前の友人との別れに心を砕かれていたのだ。

この本のすごいところは、読者を一気にその年齢に戻してしまうところだ。この場面を読むと、あの時の教室に引き戻されたような感覚に陥る。紀子と全く同じ経験をしたわけではないのに、簡単に紀子の毎日を追体験できてしまう。そして、何より不思議なのは、どんなに悲惨な時代の話を読んだとしても「大人になってよかった」ではなく、「あの毎日はもう戻って来ないのだ」という切なさを感じることだ。面倒くさくて、理不尽で、今から考えればどうでもよいことでよくよしていたあの頃は、もうどうあがいたって自分の力だけでは作り出すことはできない。そんなことを改めて思い知らされた気持ちになる。そして、もうひとつ思い出す。私たちは何の力も持たない子供だったけど、真実は確実につかんでいたのだ。一緒にいた友人と違う学校に進んでしまえば、もう今までの関係のままでいることはできないということを知っていたように。大切なことは心の中でしっかりと分かっていた。

この物語では、なにか特別な事件が起こるわけでも、ドラマティックな青春があるわけでもない。ただ、どこにでもいる普通の女の子が人生を生きているだけ。それだけなのに、こんなにも惹きつけられて、夢中になってしまう。それは読者もまた、どこにでもいる普通の子で、一生懸命に人生を生きてきたからに違いない。